

金剛寺「弘法大師像」の現状模写 及び部分復元研究

加藤清香（愛知県立芸術大学大学院）

【研究目的】

本研究の目的は、弘法大師空海の御影像で絹本作品としては現存最古とされる金剛寺所蔵の重要文化財「弘法大師像」（絹本着色 縦141.5cm 横116.5cm）（以降「金剛寺本」）の欠損部分の想定復元を行い、現状作品に即した彩色模写を試みることにより、欠損前の図様を明らかにすることである。本作は、高弟・真如親王が大師在世中に描いたと伝承される高野山御影堂安置の秘仏「弘法大師像」（以降「高野山本」）を根本とした第三転写本であることから、本研究は単なる図像整理にとどまらず、根本図様を窺い知るための一助になり得ると考える。

◆弘法大師像について

真言密教の開祖である空海（774～835）が入定後、「弘法大師」の諡号を賜り、わが国においてその名は信仰とともに広まり、図像も多く制作された。

いわゆる弘法大師像として定型化された容貌の特徴は、褐色地の衣を纏い、右手に密教法具の一つである五鈷杵、左手は念珠を執り、顔は右に向けて牀座に坐し、牀座の前に木履、脇に水瓶を置く形をとる。また、頭頂と後頭部に見られる緩やかな突起も特徴として挙げられる。（図1）



図1 弘法大師像の定形図様

図様の起源は、承和2年（835）空海が入定する前に、弟子たちが大師の肖像を残すならどのような姿にするかを尋ねたところ、空海がこうあるべきと示した姿を、絵を描くことに長けていた弟子・真如親王が描いたと伝承される。

真如親王（799～865頃）は51代・平城天皇の第三皇子であるが、宮廷内の抗争事件によりその座を廃された。その後、空海に師事し、十大弟子の一人となった人物である。その親王が描いたとされる図様は真如親王様式と呼ばれ、伝承の広がりとともに現在に至り、最も流布した様式である。真如親王真筆の根本御影像「高野山本」は高野山御影堂に安置されるが、秘仏であるため拝観することはできない。特別な修行を終えた者のみが目にするを許されるといい、真言宗僧侶の水原

ぎょうえい
堯栄氏の著書『弘法大師影像図考』（丙午出版）には、「眞像は古色蒼然と申すべきか黝然として肉眼にては明瞭に拝見することができぬ。」と、間近に拝観しても千年以上前の作品を明瞭に見ることの難しさが書かれている。また、御影堂は過去三度の火災に見舞われ、修理も七回に及ぶとの記録があり（『弘法大師御影の秘密』山路天酬著（青山社）より）、制作当時の状態を真に残していると考えるのは困難である。

鎌倉時代以降、信仰の急速な広がりとともに大師作品の制作も盛んになり、数多くの作品が現存し、優品も少なくない。真如様式の他に東寺様式や善通寺様式などの系統も残るが、多くの図様は高野山本が底本であると考えられており、真如親王筆と呼ばれる御影が真言密教において、いかに重要で権威ある尊像であるか想像できる。

◆金剛寺本について

前述の通り高野山本は秘仏となっていて未公開であることから、金剛寺本（12世紀後半）は平安時代の現存遺品として、絹本作品では最古の優品に位置付けられている。

金剛寺本は、承安年中（1171～1175）に創建された当寺の御影堂に安置するため新たに書写され、高野山本の第三転写本と記録されている（『大日本古文書 金剛寺文書』）。根本図像である高野山本の図様を伝える上でも大変貴重な作品である。

金剛寺本は、のびのびと描かれた衣文線に緊張感のある肉身線、また顔立ちは整い、鋭い眼差しのなかにも柔和さを併せ持った表情は本作品の特に優れている点であると感じる。しかしながら画面下部の牀座の脚、水瓶、木履が欠損し、また絵具層の変色や絹の劣化、特に大師像をとりまく空間部分の欠落が著しく、保存の点においても課題となっており、鑑賞上の影響を及ぼしていることは大変残念である。本研究では、欠損部の図像の整理を行うことにより、金剛寺本の芸術性を再確認することである。同時に、根本御影である高野山本の歴史的価値、絵画的価値の再確認になり得るという点で、意義があると考えられる。

【欠損部の推定復元研究】

欠損部の復元方法として、金剛寺本の現状白描模写を行い同画面上に欠損部分の推定復元図を重ね合わせ、一枚の白描画を完成させる。その後絵絹に写し現状に即した彩色を行うが、本来図様の成り立ちとは関係のない剥落部分は出来る限り取り除き、現状と復元部分の一体感のある模写を目標とする。

また欠損部の図様復元は、類似本や同時代の作品の比較検討や制作当初の時代性などを織り込み、多角的に検討を試みる。作品比較に関し、高野山本の系統を受け継ぐ作品として、現在国の重要文化財に指定されている優品は金剛寺本の他に、和歌山 龍泉院本・東京 総持寺本・東京 大師会本の三件があり、これらを中心に検討を行う。また、市の文化財に指定されている作品など、画像による図様確認ができる作品も参考とする。

- ・高野山真言宗別格本山 龍泉院（重要文化財）鎌倉時代
- ・高野山真言宗別格本山 親王院
- ・真言宗豊山派 西新井大師総持寺（重要文化財）鎌倉時代

- ・公益財団法人 大師会（重要文化財）鎌倉時代
- ・高野山真言宗 飯盛寺（福井県指定文化財）鎌倉時代

◆ 牀座の脚について

牀座は、金剛寺本も比較作品も大師が悠然と座れるように描かれている。座面は台形型で、脚は座面に対し前後がやや八の字状に付き、前脚が後ろに比べやや長く描かれる。

画面状態の良い親王院本・西新井大師本と木目の比較をしたところ、肘掛や脚の木目の流れが左右対称に描かれる点が共通しているが、個々の作品内での規則に従い描かれる。表現方法は、大きな流れで描かれる金剛寺本に対し、西新井大師本は細かく複雑な表現で、共通性は見受けられない。

◆ 木履について

金剛寺本の木履は完全に欠損している。同系統の作品同士を比べると、様式内定型を取り、どの作品もつま先から履き口までに盛り上がりのある半円を二つ描く形である。色味も表面は黒色で内側に白色が施されている。また復元に際し、その大きさも他図像の尊像と木履との比率などから決定したが、位置は二通りある。具体的に、a) 並べられた木履が牀座脚より一足分手前に出ている作品 b) 二足とも脚の内側に入っている作品である（図2 木履の位置）。本研究では前者をとったが、選択理由として a)・b) それぞれに作品を振り分けた結果、比較的 a) の図様が多く見られたことと、時代が古いものを優先に検討した結果である。

◆ 水瓶について

水瓶は完全欠損ではなく、頂上の長い突起物（尖台^{せんだい}）や注口部は残っている。その部分の形を比較すると、どの作品も六角柱の尖台に胴部は丸みを帯びた逆台形型で、肩部分に注ぎ口がつくといっ

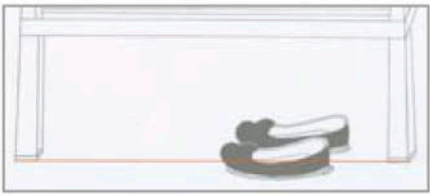
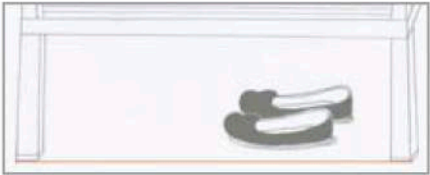
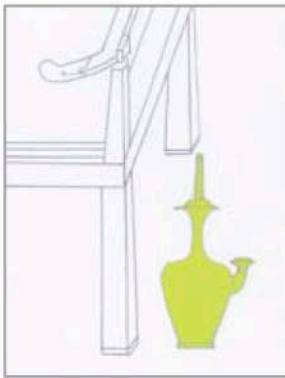
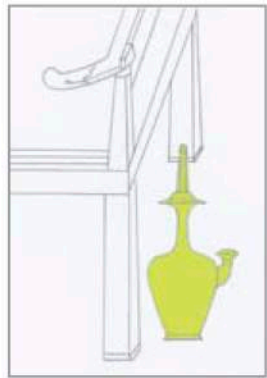
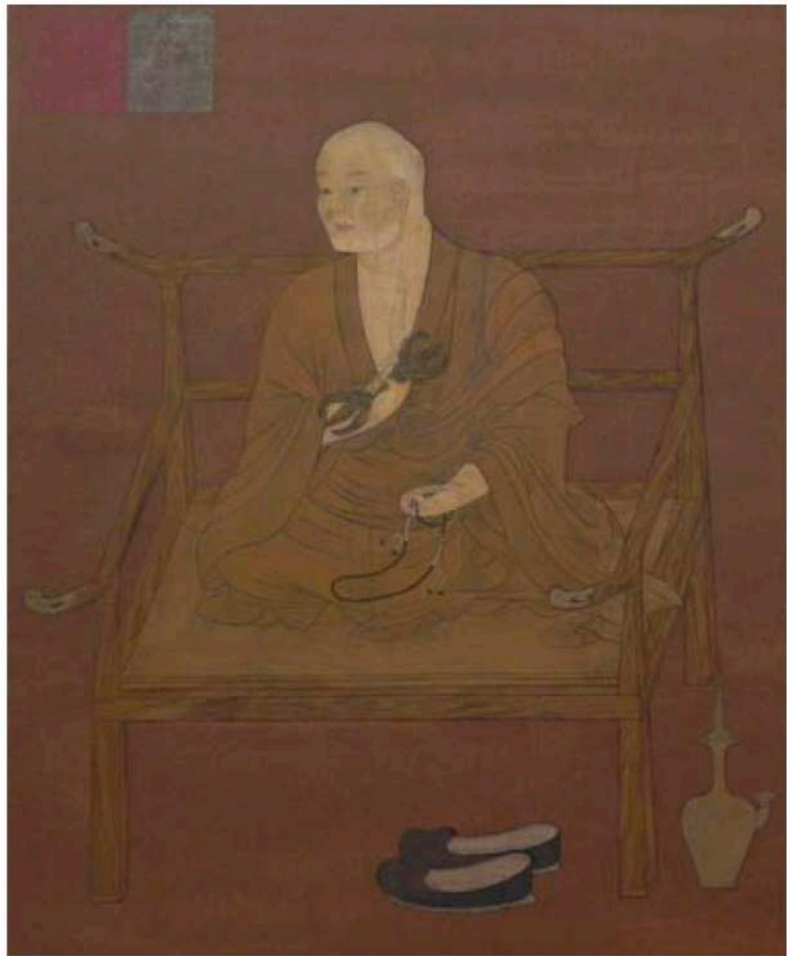
木履の位置		水瓶の位置	
a)○	b)●	a)○	b)●
			
龍泉院	○	○	
大師会	○	○	
西新井大師			●
親王院		○	
飯盛寺	○	○	

図2 木履、水瓶の位置比較

た真如様式共通の型をとっている。形は同様だが、配置場所の相違が見られ（図2 水瓶の位置）、尖台の位置が金剛寺本と同様の場所を取っている作例を選択し置かれた位置の決定をする。

【まとめ】

真如様式は、右手に五鈷杵、左手は念珠を執り、顔は右に向けて椅子式の牀座に坐し、その前に木履、脇に水瓶を置く形を典型とする。さらに、画面サイズが縦横1mを超える比較的大きな図像である。本研究で作品の比較検証をした結果、個々の形状に関してはほぼ同様であるものの、水瓶や木履の位置に相違がみられた。表現方法では牀座の木



金剛寺蔵「弘法大師像」欠損部の想定復元及び現状模写

目が作品ごとに異なり、法具や人体の彩色表現も共通性が見受けられない。以上より、真如様式の尊像として、法具の形状や姿が統一されていることを前提に、礼拝の対象として個々が独立した尊像として転写されたと考えられる。また、牀座（脚の付き方や、座面の広さ）に対する大師像の比率が金剛寺本と非常に類似していることから、同様の図像もしくは来歴の近い図像から転写し制作されたことを確信した。比較検証により、高野山本の第三転写本である金剛寺本の歴史的、絵画的な重要性が改めて示される結果となった。

本研究、欠損部の想定復元を行い、制作当初の図像に近いと思われる作例の一つを提示することができたのではないかと考える。それにより鑑賞上、図像において安定感が回復され、非常に優れた作品であったことが再確認できた。

ただ彩色においては、いくつか疑問点を残す結果となった。たとえば顔面顎部分に髭のように白く残る絵の具の謎である。修理で肌裏紙をはがす際に一部剥落したとも考えられたが、原本の目視では顔面部にはっきりとした剥落の確認はできなかった。有用な資料も入手できず、解明には至らなかった。

今後の課題として、これらの調査をすすめ彩色復元を試みることで、礼拝の対象としての本作品の魅力さをさらに伝えていくことが可能になると考える。